

読んでみました

## 『五色の虹』

## — 満州建国大学卒業生たちの戦後』を読んで

三浦英之著 (集英社、1700円＋税)

この書は、戦前満州国にあった最高学府「建国大学」の卒業生たちの戦後を記したドキュメンタリーである。著者は朝日新聞社会部記者の三浦英之（1973年生まれ、現在アフリカ特派員）で、本年度の開高健ノンフィクション賞（2015年第13回）を受賞した力作である。

校にも関わらず、その特殊性ゆえ卒業生が戦後をどう闘ってきたのかを描いている。

いない。

しかし、その教育はグローバル人材の養成を目標としており、語学の授業が3分の1を占め、公用語は日本語であったが、中国語のほか、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語などを自由に履修した。そして、

建国大学は「満州国」における文系最高学府として1938年、新京市（現長春市）に創設された学校だが、その存在があまりにも身近で深く知ろうとする意識に乏しかった。本書を読むと満州国という特殊な環境の中で、「五族協和」というスローガンの下、満州に骨を埋める覚悟で多感な青年たちが共同生活の中で如何に切磋琢磨し、僅か8年しか存続しなかった学

校にも関わらず、その特殊性ゆえ卒業生が戦後をどう闘ってきたのかを描いている。建国大学は将来の満州国建設の指導者を養成するため設置された定員150名の6年制の最高学府で全寮制を旨としていた。その経費はすべて官費で賄われた。学生は将来の満州国を担うため五族から入学者を選抜したが、日本人学生は定員の半分に制限され、残りの半分は中国、朝鮮、モンゴル、ロシアの各民族の学生に割り当てられている。設立に関わったのは満州国と関東軍であり、その教育方針は「学問」「勤労実習」「軍事訓練」と、当時の帝国大学とはかなり異なったカリキュラムとなっているが、極めて戦略的な「国策大学」であることは間違

自由”を認めていたことであり、当時日本国内では禁止となっていた書物も自由に閲読することができた。学生同士の関係は全寮制ということもあり、全人格的な付き合いをしたが、当時の政治情勢からすれば日本人は侵略者であり、中国人・朝鮮人は被抑圧民族であったわけだが、「建大」名物の『座談会』でも底流にはその意識が色濃く流れていたようだ。

ドキュメントは卒業生たちの戦後を詳細に追跡しているが、日本人も非日本人も「建国大学」の卒業生であることによつて、受けたいわれなき差別を浮き彫りにしている。特に非日本人では戦勝国民となったにもかかわらず、国策大学の出身ということで、中国・朝鮮では「日本帝国主義への協力者」として弾圧を受けた卒業生も多い。ここでは、多くを触れることは紙幅の関係でできないが、序章の2010年に開かれた最後の同窓会での描写で、卒業生たちがいつか互いに連絡を取り合えるようにと密かに編み続けてきた同窓会名簿がある。国家間の国交が途絶えていたときでも、特殊なルートをたどり運よく連絡先が判明すると手製の名簿に記録し、約1400名分の『建国大学同窓会名簿』があることを知り、その青春の思いへの強さに圧倒された。

(福島靖男)